

## 一事例における TAT とロールシャッハ・テストの比較

山下 京子

(2008年10月6日 受理)

### A Comparison of TAT with Rorschach Test in a Case of Student Counseling

Kyoko YAMASHITA

#### Abstract

This study concerned a case of student counseling in which TAT and Rorschach Test were performed twice, once at the initial interview and once at the end of the counseling. The analysis and interpretation of each of the tests were given and psychological situations of the client revealed by the analysis and interpretation were compared. The Rorschach Test was found to improve cognition but clearly showed a problem remaining in the aspect of social adaptation. The TAT showed changes to a simple and immature object-relation, revealing that social withdrawal achieved mental stability. The TAT also indicated that the object-relation shown by the TAT needed to be actively taken up as a topic in interview. The above data clearly showed that TAT could be used as an effective indicator different from Rorschach Test for reviewing the effect of interview and had a great use value for deciding interviewing policies.

#### 1. は じ め に

TAT とロールシャッハ・テスト(以下ロ・テストと略)の関係について、山下(2004)は、53名の大学生女子に対して TAT とロ・テストを実施し、TAT に対しては SCORS(Westen, 1991)を、ロ・テストには包括システム(Exner, 2001)を用いて、両検査に示された結果がどのように関連するのかを対象関係を中心に検討した。SCORS の4変数とロ・テストの変数をステップワイズ法による回帰分析を用いて比較した結果、両検査の変数間には有意な関係が見出されたが、ロ・テストの変数の特徴は、必ずしも SCORS 得点に反映されないことも明らかになり、TAT 反応の形式的側面だけでなく、内容的側面を検討すべきことが示唆された。

TAT の内容的側面に注目したカテゴリーとしては、鈴木(2003)の反応カテゴリーをあげることができる。山下(2003)は、鈴木(2003)の反応カテゴリーを用いて、大学生女子54名の TAT 反応を分析し、青

## 一事例における TAT とロールシャッハ・テストの比較

山下 京子

(2008年10月6日 受理)

### A Comparison of TAT with Rorschach Test in a Case of Student Counseling

Kyoko YAMASHITA

#### Abstract

This study concerned a case of student counseling in which TAT and Rorschach Test were performed twice, once at the initial interview and once at the end of the counseling. The analysis and interpretation of each of the tests were given and psychological situations of the client revealed by the analysis and interpretation were compared. The Rorschach Test was found to improve cognition but clearly showed a problem remaining in the aspect of social adaptation. The TAT showed changes to a simple and immature object-relation, revealing that social withdrawal achieved mental stability. The TAT also indicated that the object-relation shown by the TAT needed to be actively taken up as a topic in interview. The above data clearly showed that TAT could be used as an effective indicator different from Rorschach Test for reviewing the effect of interview and had a great use value for deciding interviewing policies.

#### 1. は じ め に

TAT とロールシャッハ・テスト(以下ロ・テストと略)の関係について、山下(2004)は、53名の大学生女子に対して TAT とロ・テストを実施し、TAT に対しては SCORS(Westen, 1991)を、ロ・テストには包括システム(Exner, 2001)を用いて、両検査に示された結果がどのように関連するのかを対象関係を中心に検討した。SCORS の4変数とロ・テストの変数をステップワイズ法による回帰分析を用いて比較した結果、両検査の変数間には有意な関係が見出されたが、ロ・テストの変数の特徴は、必ずしも SCORS 得点に反映されないことも明らかになり、TAT 反応の形式的側面だけでなく、内容的側面を検討すべきことが示唆された。

TAT の内容的側面に注目したカテゴリーとしては、鈴木(2003)の反応カテゴリーをあげることができる。山下(2003)は、鈴木(2003)の反応カテゴリーを用いて、大学生女子54名の TAT 反応を分析し、青

た。一方, Cl. は家族の問題を抱えていたが, そのことが面接で語られることはほとんどなかった。

面接開始直後に 1 回目のロ・テストを, 約半年後に 1 回目の TAT を実施した。2 回目のロ・テストと TAT は, 面接終結直前に実施された。

### 3. テ ス ト 結 果

#### 1) ロ・テストの結果

1 回目のロ・テストのコーディング結果を表 1 に, 2 回目のロ・テストのコーディング結果を表 2 に示した。表 1, 2 をもとに構造一覧表を作成し, 1 回目のロ・テストの構造一覧表を表 3 に, 2 回目のロ・テストの構造一覧表を表 4 に示した。

表 1 1 回目 ロ・テスト結果

Card	Resp. No.	Loc S DQ	Determinants	a-p	FQ	2	Contents	P	Z	SS
I	1	Do 4	F		—		A			
I	2	WS o	F		o		(Hd)		3.5	GHR
I	3	W o	m	p	o		A		1.0	
I	4	Dd o 99	F		—	2	Ad			FAB
II	5	D v/+ 6	CF. C'. YF		—		Art, Bl, Fi		3.0	MOR
II	6	Do 2	F		u	2	Ad			MOR
II	7	W+	M. m. CF	a p	—	2	H, Bl		4.5	AG PHR
II	8	DS+ 5	m. CF	a	o		Sc, Fi		4.5	
III	9	Ddo 99	M	p	—	2	H, Ay			MOR PHR
III	10	Ddo 99	F		—		A			
III	11	Ddo 32	M	p	u		(Hd)			GHR
III	12	Ddo 34	M	a	o		Hd			PER PHR
III	13	Do 2	m	p	u	2	An			
III	14	D+ 1	M	p	—		H, An		4.0	ALOG PHR
IV	15	Wo	F		o		H	P	2.0	INC GHR
IV	16	D+ 7	F		—		A			
V	17	DdS o 99	F		o	2	A		1.0	
V	18	D+ 7	F		u		A, Id		2.5	
V	19	DdS o 99	F		—		Ad		4.0	
V	20	W+	M	p	o		H, Cg		2.5	GHR
VI	21	Wo	F		o		Sc	(P)	2.5	
VI	22	Ddo 99	F		—		A			
VI	23	Ddo 99	M	p	u	2	H			MOR PHR
VI	24	Ddv 99	F		u		Bt			
VI	25	Ddo 99	FY		u		H			GHR
VI	26	Ddo 99	M	p	—		H			PHR
VII	27	D+ 1	FM	a	—	2	A, Id		1.0	FAB2
VII	28	DS o 7	F		—		H, Cg			PHR

VII	29	Ddo 99	M	p	—		Hd					PHR
VII	30	Ddo 99	F		—		A					
VIII	31	Ddv 99	FD		—		Sc					
VIII	32	DdS o 99	FM. FD	p	—		Ad		4.0			
VIII	33	Do 1	FM	a	u	2	A					
VIII	34	D + 8	F		—		(Hd), Cg		3.0	INC		PHR
VIII	35	Wv	F		o		Art					
IX	36	Dv 2	CF		o		Fi					
IX	37	D + 9	m	a	—	2	H, Id		2.5	FAB		PHR
IX	38	D + 12	M	a	o	2	H, Sc		2.5	AG		PHR
X	39	W+	FC		—	2	A, Bt	P	5.5	MOR		
X	40	W+	CF. C'		o		Bt, Sc		5.5			
X	41	W+	M. m. CF	a-p	a	—	Fi, H		5.5	AG		PHR
X	42	D + 8	M	a	—		H, Sc		4.0	AG, DV		PHR

表2 2回目 ロ・テスト結果

Card	Resp. No.	Loc S DQ	Determinants	a - p	FQ	2	Contents	P	Z	SS	
I	1	Do 4	F		—		A				
I	2	Ddv 99	C'F		—		Hd				PHR
II	3	Do 2	F		u	2	Ad			INC	
II	4	W+	M. m	a p	o		H, Bl	(P)	4.5	AG, MOR	PHR
III	5	Wv	F		—		Art				
III	6	DdS+ 99	FC. FC'		—		Cg		4.5		
III	7	DdS o 99	F		—		Hd				PHR
IV	8	Wo	FM	p	u		A		2.0	INC, MOR	
IV	9	Dv 5	F		—		Ls				
V	10	Do 7	F		u		A				
V	11	Ddo 99	F		—		H			MOR	PHR
V	12	Do 4	F		u	2	Ad				
VI	13	Wo	F		u		Sc	(P)	2.5		
VI	14	Do 1	F		o		Bt				
VI	15	W+	M	p	u		H, Art		2.5	MOR	PHR
VII	16	Ddo 22	F		—		A			INC	
VII	17	DSO 10	F		—		Hh				
VII	18	Do 9	F		o		Hd				PHR
VII	19	Ddo 99	F		o		Ad				
VIII	20	Do 1	F		u	2	A				
VIII	21	Dv 4	F		o		Ls				
VIII	22	Do 2	FM	p	—	2	A				
VIII	23	DdS o 99	F		—		(Hd)		4.0		PHR
IX	24	Dv 8	YF		o		Na				
IX	25	DSO 22	FM. C	p	u		Ad		5.0	ALOG	
IX	26	Ddo 21	F		o	2	(Ad)				
IX	27	Ddo 99	F		—		Ad				
X	28	Do 8	m	p	—	2	An			MOR	
X	29	Do 9	FC		—	2	A				
X	30	Do 1	FM	p	u		A				
X	31	Do 10	F		u		Hh				

### 構造一覽表 (STRUCTURAL SUMMARY)

	FQx	MQual	W+D
+	0	0	0
o	12	3	11
u	8	2	4
-	22	7	11
none	0	0	0

表4 2回目ロ・テストの構造一覧表

構造一覧表 (STRUCTURAL SUMMARY)			
比率・%・数値 (RATIOS, PERCENTAGES AND DERIVATIONS)			
情報処理 PROCESSING	媒介 MEDIATION	思考 IDEATION	感情 AFFECT
Zf=7	XA%=0.55	a:p=1:7	FC:CF+C=2:1
W:D:Dd=5:17:9	WDA%=0.68	Ma:Mp=1:1	Pure C=1
W:M=5:2	X-=0.45	2AB+(Art+Ay)=2	SumC':WSumC=2:2.5
Zd=4.5	S-=0.29	MOR=5	Afr=0.41
PSV=0	P(P)=0(2)	M-=0	S=5
DQ+=3	X+=0.23	Mnone=0	Blends:R=3:31
DQv=5	Xu%=0.32		CP=0
統制 CONTROL	自己知覚 SELF PERCEPTION	対人関係 INTERPERSONAL	
R=31 L=1.82	3r+(2)/R=0.23	COP=0 AG=1	
EB=2:2.5 EA=4.5 EBPer=N/A	Fr+rF=0	GHR:PHR=0:7	
eb=6:3 es=9 D=-1	SumV=0	a:p=1:7	
Adj es=8 Adj D=-1	FD=0	Fd=0	
FM=4 C'=2 T=0	An+Xy=1	SumT=0	
m=2 V=0 Y=1	MOR=5	Human Cont=7	
	H:(H)+Hd+(Hd)=3:4	Pure H=3	
		PER=0	
		Isol Indx=0.16	
領域の継起 (SUMMARY OF APPROACH)			
I D Dd	VI W D W		
II D W	VII Dd DS D Dd		
III W DdS DdS	VIII D D D DdS		
IV W D	IX D DS Dd Dd		
V D Dd D	X D D D D		
鍵変数による解釈戦略			
CDI>3:統制→対人知覚→自己知覚→感情→情報処理過程→媒介→思考			
領域の特徴 (LOCATION FEATURES)	決定因子 (DETERMINANTS)	反応内容 (CONTENTS)	
	ブレンド Blends シングル Single		特殊指標
Zf=7	M.m	H 3	S-CON=7
Zsum=25.0	FC.FC'	(H) 0	PTI=3
Zest=20.5	FM.C	Hd 3	DEPI=5*
W=5		(Hd) 1	CDI=4*
D=17		Hx 0	HVI=Yes
W+D=22		A 8	OBS=0
Dd=9		(A) 0	
S=5		Ad 5	特殊スコア
発達水準 (DQ)		(Ad) 1	(SPECIAL SCORING)
+ 3	C'F 1	An 1	Lvl Lv2
o 23	C' 0	Art 2	DV 0 DV2 0
v / + 0	FT 0	Ay 0	INC 3 INC2 0
v 5	TF 0	Bl 1	DR 0 DR2 0
	T 0	Bt 1	FAB 0 FAB2 0
	FV 0	Cg 1	ALOG 1
形態水準 (FORM QUALITY)	VF 0	Cl 0	CON 0
FQx MQual W+D	V 0	Ex 0	
+ 0 0 0	FY 0	Fd 0	SUM6=4
o 7 1 5	YF 1	Fi 0	WSUM6=11
u 10 1 10	Y 0	Ge 0	
- 14 0 7	Fr 0	Hh 2	AB=0 GHR=0
none 0 0 0	rF 0	Ls 2	AG=1 PHR=7
	FD 0	Na 1	COP=0 MOR=5
	F 20	Sc 1	CP=0 PER=0
		Sx 0	PSV=0
		Xy 0	
		Id 0	
	(2)=7		

表3に示されたように、1回目のテスト結果の特徴として、特殊指標で、 $S-CON=6$ 、 $PTI=4$ 、HVI 陽性をあげることができる。体験型は内向型であった。情報処理のクラスターでは、 $Zf=21$ と期待値よりもかなり高く、情報処理により多くの努力をしていることが示された。 $W:D:Dd=11:15:16$ で、 $Dd$ が多く、 $DdS$ も2個ある。警戒的で疑い深く、曖昧さを避ける傾向があり、否定的で怒りに満ちた構えがあると仮定される。 $DQv=4$ は、図版VI, VIII, IXで見られ、濃淡刺激や多彩色刺激、すなわち感情刺激で、時に情報処理の質が低下するのかもしれない。認知的媒介のクラスターでは、現実吟味能力に問題があることが示されている。思考のクラスターでは、HVI スタイルがあり、疑い深い思考が生じやすいこと、 $m=6$ と多く、現在のストレス状況により思考がまとまらない状況であることが仮定される。また、 $MOR=5$ と多く、悲観的な構えが思考の特徴としてある。 $Ma:Mp=5:8$ で、空想へ逃避しがちであり、 $WSum6=25$ と非常に多く、思考には深刻な障害があると仮定される。 $M-=7$ で、思考が風変わりで混乱していることを示している。このように、1回目のロ・テストにおけるCl.の心理的特徴は、特に認知的側面に特異なものがあるということが示された。

他の面については、統制クラスターでは、 $AdjD>0$ であり、ストレス耐性が強く、行動を意思によって統制できることを意味しており、Cl.は困っていないと予想される。また、Cl.は状況ストレスを体験していると仮定され、それは、 $m=6$ 、 $Y=2$ から、ストレスは思考により強い影響を与えていると予想できる。感情のクラスターでは、 $FC:CF+C=1:6$ で、感情の発散を調整することが少なく、感情表現が激しいことが示される。一方、 $Afr=0.24$ で、平均域よりもかなり低く、感情刺激を避ける傾向が非常に強いことから、Cl.が自身の感情調整の問題に気付いてかわりを少なくしている可能性もある。自己知覚のクラスターでは、HVI 該当であり、外界に対して不信感が強く、 $MOR=5$ で否定的で傷ついた自己イメージを持っている。また、 $An+Xy=2$ で通常以上の身体的関心があると仮定される。対人知覚のクラスターでは、外界に対して不信感が強いHVI 該当であり、他者との関係に慎重で用心深い。 $COP=0$ 、 $AG=4$ に示されるように、対人関係を攻撃的・競争的と見ており、 $GHR<PHR$ で、状況に適さない対人行動をとることが多いと予想される。

2回目のロ・テストの特徴は、表4に示されたように、特殊指標では、 $S-CON=7$ 、 $DEPI=5$ 、 $CDI=4$ 、HVI 陽性であった。体験型は不定型で、 $L=1.82$ のハイラムダ・スタイルであり、回避—不定型である。統制のクラスターでは、 $AdjD<0$ であり、統制力とストレス耐性は期待されるよりも低くなっている。対人知覚のクラスターでは、 $CDI$ 、 $HVI$ に該当し、社会的スキルに乏しく対人関係に困難をきたしやすいところがあり、外界に対して警戒心や不信感が強く、他者から距離を置こうとしている。 $Human\ Cont=7$ で、他者に対する関心は平均的にあるが、他者イメージは現実体験に基づいていず、 $GHR:PHR=0:7$ に示されるように、適応的

でない対人関係をとると予想される。自己知覚のクラスターでは、 $MOR=5$  で自己損傷感を抱いており、 $H : (H) + Hd + (Hd) = 3 : 4$  から Cl. の自己イメージは現実体験よりも想像に基づいていると仮定される。感情のクラスターでは、 $DEPI=5$ 、 $CDI$  に該当し、社会適応上の問題により、感情の問題が生じる可能性があると考えられる。体験型は不定型で回避型であり、判断・決定の際に、思考も感情も使いこなすことができない。 $S=5$  と多く、強い怒りの感情を持っており、 $FC : CF + C = 2 : 1$ 、 $PureC=1$  で、感情の発散は、通常は統制されているが、時に激しい感情が表現される。

2 回目のロ・テストの結果のうち、認知的側面については、情報処理のクラスターでは、ハイラムダ・スタイルで、 $Zf=7$  であった。 $W : D : Dd = 5 : 17 : 9$ 、 $DdS=3$  と多く、警戒的で疑い深く、曖昧さを避ける傾向があり、否定的で怒りに満ちた構えがあると仮定される。 $Zd=4.5 > +3.0$  で、過剰統合スタイルであり、非常に注意深くすべての手掛かりを見落とすまいとする一方で、 $DQv=5$  で情報処理の質が時に低下することがある。認知的媒介のクラスターでは、現実検討能力が低下していることが示されている。 $P(P)=0(2)$  と少なく、 $Xu\%=0.32$  で、非慣習的な反応が生じやすい。思考のクラスターでは、体験型は回避—不定型で、 $a : p = 1 : 7$  で思考の柔軟性に乏しく、 $MOR=5$  に示されるように、思考における悲観的な構えが強いと仮定される。 $WSum6=11$  で、思考に深刻な問題があると考えられる。

## 2) TAT の結果

1 回目と 2 回目の TAT のプロトコルのうち図版16を除いたものについて、鈴木(1997)の反応分類枠に従い、分類を行った。また、SCORS(Westen, 1991)を用いて、『人物表象の複雑性』(以下『複雑性』と略)、『関係パラダイムの感情調』(以下『感情調』と略)、『関係性と道德基準への情緒的投資能力』(以下『情緒投資』と略)、『社会的因果性の理解』(以下『因果性』と略)について、5段階評定を行い、その結果を表5に示した。評定基準は、Westen(1991)と Kelly(1997)に従った。『複雑性』は、自己と他者の見解を明確に定義し区別する程度を測定し、自己と他者の見解の区別が明確でないレベル1から、他者の感情状態、動機、態度、無意識的過程に言及し、明確に推論がなされるレベル5までの5段階で評定された。『感情調』は、個人が関係を安全、養育的、価値あるものとみなすか、対照的に破壊的、有害、脅威的とみなすかの程度を測定する尺度で、個人の内的世界を脅威的、危険、苦痛であるとみなすレベル1から、決定的にポジティブな対象表象と対人関係期待を示すレベル5までの5段階で評定された。『情緒投資』では、他者との関係性がどの程度手段より目的として描写されているか、また欲求充足よりも相互性を強調しているかを測定し、自己の欲求満足に第1の関心があるレベル1から、自己と他者双方が幸福になる関係の発展に関心を持っているレベル5の反応まで、5段階で評



表5 TAT の 結 果

図 版	始発反 応時間 (秒)	反 応 時 間 (秒)	鈴木 (1997)	SCORS (Westen, 1991)			
				複雑性	感情調	情緒投資	因果性
1 (1回目)	4	44	I i 2 A	4	3	3	3
	(2回目)	127	I i 6 E	4	2	1	3
2 (1回目)	6	36	III i 2	3	3	1	2
	(2回目)	58	III i 2	3	3	1	2
3 BM (1回目)	2	31	I iv	3	2	1	3
	(2回目)	30	II ii 2	2	3	1	3
4 (1回目)	6	33	III i	2	3	2	3
	(2回目)	46	I i 2	2	3	3	3
5 (1回目)	4	25	I ii 1	3	3	1	3
	(2回目)	44	I ii 1	3	3	1	3
6 GF (1回目)	4	34	II iii	2	3	2	3
	(2回目)	22	II iii	2	3	2	3
7 GF (1回目)	9	40	I iv 1 A	3	4	2	3
	(2回目)	3	I ii 2	4	4	2	3
8 BM (1回目)	8	75	II ii 2 A	4	3	2	2
	(2回目)	17	I i 1	2	1	1	1
9 GF (1回目)	7	98	III i	4	3	1	3
	(2回目)	14	I ii 2	2	3	1	1
10 (1回目)	7	69	II i 1	4	5	4	4
	(2回目)	33	III i 3	2	3	1	1
11 (1回目)	11	63	I i 1 Ac	2	2	2	3
	(2回目)	18	I ii 2	2	3	1	2
12F (1回目)	3	82	I i 1 A	3	1	1	2
	(2回目)	45	III ii	1	3	2	3
13MF (1回目)	5	105	I i 2	4	1	3	4
	(2回目)	22	I v	3	2	3	3
14 (1回目)	7	48	I i 1 B	4	2	2	3
	(2回目)	23	I ii 2	3	3	2	3
15 (1回目)	10	84	II ii 1	2	2	1	2
	(2回目)	29	III i 2	4	2	1	3
16 (1回目)	12	100					
	(2回目)	19	58				
17GF (1回目)	5	70	I ii 1	3	2	1	3
	(2回目)	18	II ii 2	3	3	1	3
18GF (1回目)	17	90	II i 2	3	1	2	3
	(2回目)	20	II ii 1	3	2	3	3
19 (1回目)	6	66	II v	1	2	1	3
	(2回目)	25	II ii 1	1	1	1	3
20 (1回目)	7	85	I i 1 B	4	3	2	4
	(2回目)	14	II i 2 A	3	3	2	3

定した。『因果性』は、原因帰属の論理や複雑さ、正確さを測定する尺度で、因果関係の感覚をひどく障害された反応のレベル1から、複雑な思考、感情、行為からなる反応のレベル5まで、5段階で評定した。

始発反応時間の平均は、1回目7.0秒、2回目31.35秒であり、反応時間の平均は、1回目63.9秒、2回目49.7秒であった。また、図版16を除く19枚の4つのSCORSの平均は、『複雑性』1回目3.05、2回目2.58、『感情調』1回目2.53、2回目2.63、『情緒投資』1回目1.79、2回目1.58、『因果性』1回目2.94、2回目2.58であった。

1回目と2回目のTATプロトコルの特徴は、次のようであった。

1回目のプロトコルの特徴としては、親との関係については、「母親の言うとおりに、バイオリンを続けるか、壊すかの選択で葛藤する。」(図版1)、「父のやっていることに反感を持っているが、自分にも同じ血が流れているから、自分も父のように殺される。」(図版8BM)に示されるように、親の意向に背くことは、例えばバイオリンを壊すと言うような衝動的な行為を意味し、親の意向に従うことは自己の破滅を意味するということに、非常に葛藤に満ちたものになっているように感じられる。また、母親との関係は、「赤ちゃんを抱く少女のあとを心配で回って回る家政婦」(図版7GF)に現れているように、希薄であり、母性を育むというよりは、阻止するように描かれている点が特徴的である。

対人関係は、「意地悪そうなおばさんにこき使われている男性を見ているお嬢さん」(図版2)のように、直接的なかわり合いを避けるように描かれている。一方で、「嫁を殺そうとする小姑」(図版18GF)のように、攻撃的な関係も見られた。異性関係としては、「薬がないと慌てる薬物依存の男の人に対して、薬物依存の女の人があだめる」(図版4)、「上司の発言に対して、待ってくださいと言う女性」(図版6GF)、「薬物依存の男の人がリストラされて、女性に一方的に衝動的・攻撃的行動を向け、女性を殺し、自分も自殺する。」(図版13MF)に示されるように、異性間の相互的な愛情関係は描かれない。さらに、「家庭を顧みることのなかった男の人が妻の死に目に会えず、一人で生きていくことも出来なくてさまよっている。」(図版20)のように、CLの男性イメージは弱弱しい。ただし、「長年連れ添った夫婦の抱擁」(図版10)のように、年老いた異性間であれば、信頼や愛情関係が表現されている。

自己に向かう攻撃性も特徴の一つである。例えば、「何もかもに疲れて、現実が嫌で腕を切った。」(図版3BM)、「背後霊に取り付かれて、呪い殺される。」(図版12F)、「女性を殺して、自殺を図る。」(図版13MF)、「立ったまま骨になる。」(図版15)、「皆から疑われて、死に場所を探している。」(17GF)に現れていた。

環境とのかかわりについては、不安や恐怖、無力感が描かれている。「何かすごい物音がして来てみたが、誰もいず、文句をつけて帰ろうとしている。」(図版5)、「恐竜から襲われた人

間が、隠れる場所がなく、走り続ける。」(図版11)、「監禁されている人が窓から出ようとしたが、足音が聞こえて、おびえて生活をしていく。」(図版14)、「何もかも分からなくなって薬を飲んで眠ったときの夢の中。何も見えず、同じところをぐるぐる回る。」(図版16)には、環境とのかかわりで、不安や恐怖を感じていることが表現された。また、「雪かき機で雪かきをしていたが、雪がどんどん積もるので嫌になって逃げた。」(図版19)、「結婚式場から逃げ出していたらと過去の自分を想像する。」(図版9GF)では、無力感が表現されていた。

2回目のTATのプロトコルの特徴としては、親との関係では、「勉強は飽きたので、遊びに行きたいが、メイドが喋ってうるさいし、子守をさせられて我慢するしかないと諦めている。我慢できずに遊びに行った。」(図版7GF)、「夢の中で、自分の親が自分のおなかを切って何かを埋め込んでいる。」(図版8BM)、「親が死んだことに気付いて、勝手に家を飛び出したことを悩みながら、手を合わせたが、家出の原因は親にあるから、墓を蹴ろうかと考えて人目を気にしている。」(図版15)、「遊びに出たら帰ってこない娘に母が怒り、けんかになっている。娘は頭に来て荷物をまとめ出て行った。」(図版18GF)に示されるように、被害的に捉え、親への反抗が表現されている。

対人関係では、「意地悪そうな女の人になる。明日も観察に来ようかな。」(図版2)、「急いで走っている女の人。こけろと言ったら、自分がこけた。」(図版9GF)に示されるように、一人称の語りであり、他者との直接的なかわりはない。また、「一人で行くのは無謀と止めに入っているが、聞くんもりはない。」(図版4)、「知らない人に火を持っていないかと聞かれ、ないと答えても去ってくれないので、自分が去ろうかなと考えている。」(図版6GF)、「皆で陰口を言っていたところに、その人が現れて、気付かないで話を続けていたが、気配を感じたので止めた。」(図版12F)など、他者とのかわりを避けようとしている。さらに、「いい話があるから逃げようとささやいたが、その内容が暗号みたいでわからない。」(図版10)のように、コミュニケーション不能が描かれている。

自己に関しては、「バイオリンを弾いてみたけど音が鳴らない。」(図版1)のように自己損傷感が語られたり、「叫び声を聞いたが、間違いだった。」(図版5)、「川を見ていたら、自分が映っていて、最近ふけたなと思った。」(図版17GF)、「待ち合わせをした人が来ない。一日間違えていた。」(図版20)など、自己の衰えが語られることも特徴的である。また、「飲みすぎて気持ちが悪くて起き上がれないが、誰も助けに来ない。」(図版3BM)のように、援助のなさが語られた。

不安や恐怖が語られることも特徴的である。例えば、「寝室で知らない人が殺されているのに気づいて、動揺している。警察に電話したが、その人は冷たいので怖くなった。」(図版13MF)、「海の上を走る乗り物で、中にミサイルが入っている。もう既に1機は飛んで行って、次のミ

サイルも準備されていて、それに気づいた近くを走る船の船長がびっくりして逃げようとしている。」(図版19)である。

環境とのかかわりでは、「きれいな滝があって、きれいな虹があってきれいなんだけど、帰る道がふさがれていて帰れない。案内した人を皆で追い詰めている。」(図版11),「夢の中で誰かが手招きをしている。それがどこで誰か分からないし、今居るところは居心地が良いので動きたくなかった。」(図版14),「雲の中において、周りには誰もいなくて一人だけで、最初は誰からも干渉されなくて良いと思っていたが、だんだん寂しくなって、雲から出ようと思ったが、いざ出るとなると怖かったので戻ってきた。」(図版16)に示されるように、動くことが出来ない、または動きたくないという、ひきこもりの状況が語られた。

#### 4. 考 察

##### 1) 1回目と2回目のロ・テスト結果の比較

ロ・テスト結果の1回目と2回目を比較すると、特殊指標では、1回目でS-CON=6, PTI=4, HVI 陽性, 2回目でS-CON=7, DEPI=5, CDI=4, HVI 陽性へと変化した。PTIに該当する場合は、知覚と思考に重大な障害がある可能性を示唆しているが、2回目では、PTIには該当せず、知覚と思考の歪みはやや是正されたと考えられる。その代わりに、2回目では、社会的な対処力不足を示すCDIに該当し、社会的にうまく立ち振る舞えないことから抑うつ状態に陥っていると考えられる。卒業学年になり、これまで学内での生活が中心であったCl.が就職活動などで社会との接点が増え、社会的スキルを求められる場面を多く体験したことも関係しているのかもしれない。自殺指標であるS-CONは1回目よりも2回目で1ポイント高くなっているが、Cl.の自殺念慮が根強く残っていることを示しており、面接過程において、自殺企図が繰り返されたことから、今後も医療機関における継続的な治療を要すると考えられる。HVIは2回目でも該当し、Cl.は傷つきやすさへのとらわれがある。

体験型は、内向型から回避—不定型に変化した。複雑さを避ける志向性が一貫性のない概念的思考を助長し、感情の調節もうまくなりかなくなっていると予想される。回避—不定型は、他の体験型に比べ、適応上の問題を抱えやすいと言われており、面接終結時のCl.の心理的状态は、面接開始時よりも、不適応状態にあったと言わざるを得ない。

1回目の結果は、PTI>3に該当するために、認知的側面から検討され、2回目では、CDI>3により、統制から検討された。認知的側面のうち、情報処理過程において、1回目では情報処理により多くの努力をしていたが、2回目では回避型の対処スタイルの人に期待される程度に変化した。Ddの多さは変化なく、曖昧さに巻き込まれるのを避けようとしていることの

現れであろう。いずれも効率の良い情報処理は行われていない。2回目では、情報の取り込み過剰スタイルに変化した。また、1回目の情報処理の質については、たいいてい良く、複雑であるが、時に質が損なわれることもあるから、2回目で、情報処理の質が適切なレベルよりも低く、複雑な状況ではより悪くなるへと変化した。認知的媒介では、WDA%は、0.58から、0.68へ、XA%は、0.48から、0.55へと変化していた。1回目も2回目も、期待される範囲をかなり下回っており、現実検討に深刻な問題があることを示す結果であるが、認知的機能の低下は、より深刻ではない方向に変化している。いずれも、認知的媒介の手掛かりが明確ではない状況でより機能の低下が深刻なものになる。認知的側面の中では、思考に関して大きな変化が認められた。体験型が、内向型から回避—不定型へと変化したことにより、思考の優位性から、複雑な環境に適応するのが困難である型へと移行した。このことは良いニュースではないが、他の面では改善に向かっていえることができる。すなわち、1回目では、FM=3、m=6であり、状況に関連するストレスにより、辺縁の精神活動が著しく昂進していることが示されたが、2回目では、FM=4、m=2となり、平均値であった。また、1回目では、Ma:Mp=5:8に示されたように、Cl.には不快な状況に対処するときに空想への逃避という手段を用いる傾向があったが、2回目にはその傾向は見られなくなっていた。思考の特異性に関して、WSum6=25から11へと変化し、特異性の程度が緩和された。また、1回目では、M- =7で思考がかなり奇妙で混乱していたが、2回目ではM-はなかった。疑い深い思考が生じやすいことと、思考の特徴として悲観的な構えがあることについては変化なかった。

統制に関しては、反応数の減少、EAの減少、 $L < 1.0$ から $L > 1.0$ へ、AdjD>0からAdjD<0へ、CDI陰性から陽性へと変化した。1回目では、ストレス耐性は強く、Cl.は状況関連ストレスを体験していながらも、困ってはいない状態であったが、2回目では、Cl.は慢性的に刺激過負荷状態にあり、統制力とストレス耐性は低くなっていた。2回目では、利用できる資質も限定され、 $L > 1.0$ の回避型の対処スタイルを示していた。Cl.の現実検討能力が1回目に比べるとやや向上してきたことと考え合わせるならば、Cl.は自分の置かれている現実に対しは目を向けることができるようになったのではないかと想像される。曖昧さや複雑さを否認し、できるだけ単純化しようとすることで、刺激に圧倒されてしまう危険性を低下させているのかもしれない。

感情面では、Cl.が強い怒りの感情を持っていることや、感情刺激を避ける傾向が強いことには変化はみられなかった。感情の発散については、1回目では、調整されることが少なく、激しい感情表現をすることも少なくなかったのが、2回目では、過度に調整をしたり、調整されずに激しい感情表現になったりと一定ではないという、回避—不定型の特徴へと変化した。

対人知覚では、外界に対する警戒心や不信感の強さは変わらず、さらに社会的スキルの乏し

さが加わり、対人関係で困難を体験しやすくなっている。自己知覚では、否定的な自己イメージを抱いている点での変化は見られなかった。

これらのことから、CI. の認知的側面での改善は認められるものの、社会適応と言う観点からは、今後も継続的な心理学的支援を必要とすると考えられるが、卒業までと言う時間的に限られた学生相談で対応するには限界があった。

## 2) 1回目と2回目のTAT結果の比較

平均始発反応時間は、1回目の7.0秒に比べると、2回目ではかなり遅く31.35秒かかっていた。最も遅い始発反応時間は、2回目の図版1で127秒であり、次に図版2で58秒であった。CI. は1回目に比べ、新しい場面に適応するのが困難になっているのかもしれない。平均反応時間は、1回目63.9秒、2回目49.7秒で、2回目の方が短くなっていた。図版16を除く19枚の4つのSCORSの平均値は、大学生女子53名を対象とした山下(2004)では、『複雑性』2.63、『感情調』2.71、『情緒投資』2.05、『因果性』2.95であったが、CI. の得点は、1回目では、『複雑性』は山下(2004)の平均よりも高く、『感情調』『情緒投資』は平均より低く、『因果性』の平均の差はなかった。2回目では、4つの尺度すべてにおいて、CI. の得点は平均よりも低くなっていた。CI. の1回目と2回目の得点を比較すると、『複雑性』『情緒投資』『因果性』においては、2回目で得点が低くなり、『感情調』のみわずかではあるが2回目の方が得点が高くなっていた。これらのことから、1回目では、CI. は大学生女子の平均よりは、自己と他者の視点を明確に区別しているものの、対人関係をよりネガティブなものとして捉え、他者との関係性を手段より目的として扱うことがより少ないと予想される。また、2回目では、1回目よりもわずかに対人関係をネガティブに捉える傾向は回復したが、『複雑性』『因果性』は大学生女子の平均よりも低くなり、他者の感情状態をより明確ではない方向で推論し、より単純で、正確ではない原因帰属を行うと仮定される。すなわち、SCORSにより測定された対象関係は、1回目よりも2回目で単純で未熟な方向へと変化している。

鈴木(1997)の反応分類枠に関しては、図版16を除く19枚中9枚で、反応カテゴリーの大枠での変化が認められた。変化した図版は、3 BM, 4, 8 BM, 9 GF, 10, 12F, 15, 17GF, 20であった。図版3 BMは、「何もかもに疲れて、現実が嫌で腕を切った。」(1回目)という心理的疲労感や空虚感が表現された反応から、「飲みすぎて気持ちが悪くて起き上がれないが、誰も助けにこない。」(2回目)の身体的不調感や支援のなさが表現される反応に変化した。図版4では、男性像の変化が見られた。すなわち、「薬がないと慌てている薬物依存の男の人に対して、薬物依存の女の人がなだめる。」(1回目)という女性が男性よりも優位に立ち、女性に庇護される男性像から、「一人で行くのは無謀と(女性が)止めに入っているが、(男性は)聞くつも

りはない。」(2回目)という女性の意見に反発する男性像へと変化した。図版8BMでは、「自分も(父親のように)人を殺して、誰かに撃たれて死んでいく。」(1回目)から、「自分の親が自分を切っている夢を見た。」(2回目)へと、「切る人」から「切られる人」へ、つまり能動的存在から受動的存在へと変化した。被害感や迫害感がより強く表現された。図版9GFは、「結婚式場から逃げ出していたらと、過去の自分を想像する。」(1回目)と内向的で、自意識的な反応から、「急いで走っている女の人。こけろと言ったら自分がこけた。」(2回目)と女性同士の関係にあまり強い関心を持っていない、情緒機能が低下していると推測させる反応へと変化した。図版10は、「長年連れ添った夫婦の抱擁」(1回目)のように、男女間の信頼や愛情関係が信じられる人であろうと予想される反応から、「いい話があるから逃げようとささやいたが、その内容が暗号みたいでわからない。」(2回目)の男女関係を扱う以前のコミュニケーション不能状態を表す反応へと変化した。図版12Fは、「背後霊に取り付かれて、呪い殺される。」(1回目)から「皆で陰口を言っていたところに、その人が現れて、気付かないで話を続けていたが、気配を感じたのでやめた。」(2回目)へと変化した。Cl.が空想性や観念性に乏しく、現実主義的になっていると考えられる。図版15では、「警察に捕まって死刑を言い渡されたが、この人の霊の周りは、この人が殺した人の墓ばかりで、ずっと立ったままで骨になっいく。」(1回目)という懲罰的な反応から、「親が死んだことに気付いて、勝手に家を飛び出したことを悩みながら、手を合わせたが、家出の原因は親にあるから、墓を蹴ろうかと考えて人目を気にしている。」(2回目)の親に対するアンビバレントな感情表現へと変化した。図版17GFでは、「皆から疑われて、死に場所を探している。」(1回目)と自殺願望が表現されるが、「川を見ていたら、自分が映っていて、最近ふけたなと思った。」(2回目)と図版刺激の持つ雰囲気にあわない反応へと変化した。物事を明るく考えようとする傾向が示された。この傾向は図版20の変化にも認められ、「家庭を顧みることのなかった男の人が妻の死に目に会えず、一人で生きていくことも出来なくてさまよっている。」(1回目)から「待ち合わせをした人が来ない。一日間違えていた。」(2回目)へ変化した。

TAT プロトコルの特徴の変化としては、1回目の親との関係は、親の意向に背くには非常に大きなエネルギーを要することであり、また従うことは自己の破滅につながるような、葛藤に満ちた関係であった。また母親との関係は希薄であり、Cl.にとって母性的な母親像を描くことは難しいと思われる。2回目では、親に対して被害的な感情を抱きながらも反発し、反抗的な行動を起こそうとする子の姿が表現された。この変化は、Cl.の親からの心理的自立の動きを示していると考えられる。面接で、親子関係について語られることはほとんどなかったが、面接終結の前に、親との関係を面接で扱う時期がようやく来たと言うことであろう。2回目においてもCl.の抱く親イメージは、強制的だったり、迫害的であるが、親に立ち向かう子ども

のイメージが出てきたことは、それだけ Cl. の子どものイメージが育ってきたことを示していると考えられ、それは面接の効果のひとつであろう。

対人関係は、1回目では直接的なかわりを避けるか、攻撃的な関係として描かれていた。異性関係では、男性は弱く庇護されるべき存在として登場し、相互的な愛情関係は、老夫婦を除いて描かれることはなかった。すなわち、通常、他者間に信頼関係や愛情関係をみることが困難な人であると仮定されるが、基本的にはそうした良好な人間関係を想定する能力を持っている人ではないかと想像される。2回目では、他者との直接的なかわりを避け、引きこもりの状態へと変化した。そこではコミュニケーションは成立せず、Cl. の現実的な対人関係の困難さを推測させる。卒業を目前にして、この Cl. の心理的状态で就労することにはかなりの無理があると考えられ、就職を保留にしたままの卒業は適切であったと言える。しかしながら、1回目の TAT 実施段階で、Cl. の対人関係の困難さは予測できており、この時点で、面接にキャリア・カウンセリングの視点を導入したなら、異なる展開を期待できたかも知れず、TAT の結果をふまえた上で面接方針を立てることが必要であったとも考えられる。氏原(2005)は TAT の特徴として、より現実的な、人間関係的側面を意図的に探求することができるという点を挙げている。この TAT の特徴によって、面接の初期の段階で TAT を実施することは、テスト結果に示された対象関係の視点を取り入れて面接方針を立てるならば、現実適応など面接目標への接近に貢献すると考えられ、この点に TAT の臨床的有效性があると言える。

1回目の特徴の一つとして、衝動的に自己に向かう攻撃性が挙げられたが、2回目では、攻撃性や衝動性の表現は減少し、その代わりに自己損傷感や不全感が多く語られた。このことは、面接終結に近づくにつれて、繰り返されていた自殺企図が見られなくなったことを裏付けるものである。また、誰も助けに來ないと言う援助のなさが語られたように、Cl. の卒業後のソーシャル・サポートは不十分な状態にあり、Cl. の不安を増大させたと考えられる。この点について、面接で十分取り上げていず、悔やまれるところである。

環境とのかかわりに、Cl. が不安や恐怖、無力感を抱いていることは、すでに1回目から表現されており、2回目においても変化はなかった。2回目では、さらに無力感が高まり、引きこもりの状態が描写された。このことは、Cl. の心理の根底に希死念慮が存続することとつながっているように思われる。希死念慮の存在に関しては、ロ・テストにおいても指摘されたことであるが、最も重要な問題でありながら、面接の効果が現れていないところであった。おそらく、大学生活の数年間で解決する問題ではなく、もっと長い年月を要するのであろう。

### 3) TAT の臨床的利用に関する今後の課題

心理臨床場面において、TAT は、ロ・テストに比べると使用されることは少ないが、学生相



談では、ロ・テストを使うこと自体、病院臨床など他の心理臨床分野に比べると、格段に少ないのではないと思われる。まして、TAT となると、ほとんど利用されることはないだろう。しかしながら、本研究で示されたように、TAT は Cl. の内的対象関係を明らかにし、大学生活や卒業後の進路など現実的な問題に対応するために、Cl. にとってどのようなソーシャル・スキルや、サポートが必要とされるのかを知ることができると考えられる。そうしたことを面接で話題として取り上げ、Cl. と一緒に話し合うことも可能となるだろう。したがって、学生相談において面接に TAT を積極的に導入することは、卒業までと言う限られた年数で現実的な適応を面接の目標とする際、非常に有意義であると推測される。今後の課題としては、TAT を実施する場合、面接過程のどの時期に実施するのが適切であるかと言う時期の問題と、20枚の図版全てを扱うのか、数枚の図版を選択するのか、また選択するとすればどのような基準でどの図版を選択するかという図版選択の問題を挙げることができる。TAT に関する研究が十分とはいえない今日、まずは、TAT を臨床的に活用した事例の積み上げと、TAT 反応に関する基礎的な研究が必要である。

付記 本論文は、日本ロールシャッハ学会第9回大会（2005、山形大学）において、『自殺企図を繰り返した大学生のロールシャッハ・テストと TAT』の題目で口頭発表したものをもとに、加筆修正をしたものである。

## 文 献

- Exner, J. E. Jr. 2001 A Rorschach Workbook for the Comprehensive System. Rorschach Workshops, Asheville, North Carolina.
- Kelly, F. D. 1997 The Assessment of Object Relations Phenomena in Adolescents TAT and Rorschach Measures. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers. Mahwah, New Jersey.
- 鈴木睦夫 1997 TAT の世界—物語分析の実際 誠信書房
- 氏原 寛 2005 ロールシャッハ・テストと TAT の解釈読本 培風館
- Westen, D. 1991 Clinical assessment of object relations using the TAT. *Journal of Personality Assessment*, 56(1), 56-74.
- 山本和郎 1992 TAT かかわり分析 東京大学出版会
- 山下京子 2003 TAT 反応に示された対象関係に関する研究 広島女学院大学論集, 53, 1-26.
- 山下京子 2004 TAT とロールシャッハ・テストに示された対象関係 広島女学院大学論集, 54, 1-19.